

Bologna から大阪の明日を考える

——「下司の町」から「文化都市」へ——

鎌倉 健

(大阪経済法科大学 経済学部 教授)

「地域」とは、いうまでもなく多義的で重層的な空間概念である。したがって、1人ひとりがかもつ地域のイメージはもとより多様で、具体的な地域名となると当然、各人各様となる。私の場合、まず、脳裏に浮かぶ地名は、すでに半世紀近く過ごした大阪で、次いで生まれ故郷の広島（尾道・御調町）、そして京都である。一方、視点を海外に移すと、まずはイタリアのボローニャ Bologna である。続いてウィーン、パリと憧れの地が思い浮かぶ。このうち、それぞれ最初に思い浮かんだ、大阪とボローニャは都市としての規模は違うものの、中小製造業を中心に経済活動が活発な地であることは共通している。しかし現在の地域経済の「元気度」と「文化（豊かさ）度」となると、たちどころに違いが目につく。

そこで、この間、ボローニャに幾度となく足を運び、その違いはどこにあるのか、さらには大阪経済の再生にむけたヒントを何か見出せないかと、コムネ (comune) や県 (provincia) をはじめエミリア・ロマーニャ州とその関連団体 (ERVET と ASTER)、業者団体 (CNA)、労働組合 (CGIL)、障害者協同組合、政党 (民主党)、経済学者、中小企業経営者、靴や鞆、宝飾、彫金などの職人 (artigiano) から市民に至るまで幅広くヒアリングを重ねた。

その結果、見えてきた核心の一つは、この地域の企業間に連綿と続く、相互信頼による「競争と協調」の関係であり、S. プルスコがいった「エミリア・モデル」(Modello di Emilia) そのものであった。それならば、それはいつ頃から形成され、なぜ持続したのか、といった疑問がうまれるが、調べてみると、その源流は、16世紀はじめのローマ教皇領時代における折半分益小作農制 (mezzadria) にまで遡る関係であった。すなわち、ボローニャの企業間において信頼をベースとした相互補完関係が形成された底流には、益分小作農時代から培われたキリスト教精神のアガペー (隣人愛や無償の愛) の体現として、日常的な協力や助け合いが企業経営の場においても引き継がれた。そして、それがやがて「社会的・文化的土壌」(田中夏子) となり、この地域特有の「産業的雰囲気 (industrial atmosphere)」(A. マーシャル) が醸成されたからである。私はそれを、先のプルスコの定義に即して、「エミリア精神」(Emilia Spirit) と名付けた。これが当を得ているかどうかについては、2017年中に出版予定の、中村剛治郎編『新版 基本ケースで学ぶ地域経済学』(有斐閣) をご覧いただき、読者諸氏のご批判に委ねたいと思う。

ところで、このボローニャとは真逆の経験をしたことがある。それは院生時代に修論をまとめるため、堺の自転車産地を調査した際、同業者の関係を聞いたときのことである。彼らが語った内容は、耳を疑うような内容であった。すなわち、「経営環境が厳しいおり、工業会で何度も会合を開き、その都度、方針を決めたが、それが守られたためしがなく、決定した翌日にはすぐにそれを破る会員が出る始末だ」。そのため、「最近ではみんなが集まるのは、せいぜい同業者の葬儀のときくらい」とのことであった。

この話を聞きながら想記したのが、「知の巨人」梅棹忠夫が半世紀前に喝破した内容である。つまり、大阪は目先の利益に走る拝金主義が跋扈する典型的な町で、だから「大阪は下司 (げす) の町」と断じた。この梅棹と同様に、その後も司馬遼太郎や藤本義一、安藤忠雄など大阪に殊のほか思い入れのある文化人たちの嘆きが続いた。逆にいえば、彼らに共通する思いは、いみじくも梅棹論文の副題 (文化都市から「下司」の町へ) が示すとおり、大阪の原型は、決してそのような卑しい町ではなかったという思いがある。ならば、それはいつから変わったのか、その原因は何かなどについて究明する必要がある。

一方、大阪市の友好都市の一つにハンブルグがある。そのハンブルグは数年前、ヨーロッパで「住みよい都市」ランキングで第1位 (2016年は第3位) に選ばれたが、これは現在の大阪市にとっては大いなる皮肉と

いえなくもない。ここで、私事となり恐縮であるが、私の妻はこの地の大学、大学院で学び、わが家にはその記念碑ともいえるディプロマとともにスタインウェイが2台ある。そのうちの1台は、彼女が直接ハンブルグの本社工場で実際に弾いて選んだ品。それで奏でるショパンやラヴェル、ラフマニノフのピアノソナタやリャプノフの「超絶技巧練習曲」などで響く高音は、さながら満天に輝く星のように聴こえてくる。この音色は、ピアニストの間で、「ヤマハピアノでは決して味わえない響き」といわれている。そのヤマハの幹部があるとき、スタインウェイ社の幹部に対し、「わが社はピアノを年間3万台売っている」と自慢したところ、返ってきた言葉は、「あなたたちが売っているのは、ハーモニカー？」といわれたとのこと。この話の真偽はともかく、双方のモノづくりに対する考えなり姿勢の一端がうかがえ、興味深い。

ちなみに、ハンブルグ出身の有名な音楽家といえば、1833年生のブラームスである。生粋のハンブルグ子の彼が、愛してやまないこの町で音楽にかかわる職を得ようとしたがかなわず、失意のもと、62年ウィーン音楽院に職を得、晩年までウィーンで過ごした。いまから振り返ってみれば、ブラームスを選考から落とした審査員の無能さはまさに特筆ものといえよう。最近、私も学会誌への投稿をめぐって、これと少し似たような経験をしたが。

ブラームスに関して後日談を少し付け加えると、ハンブルグ市は1889年にブラームスに音楽家として初の名誉市民の称号を与えた。それに対しブラームスは、「祭典と記念の格言」(Op.109)を市長に贈り、その初演は自らの指揮で行った。その後、94年には「ハンブルグフィルの指揮者に」という、ブラームスにとっては「念願」の申し入れがあったが、今度はブラームスが断った。「あまりに遅すぎた」との理由で。事実、ブラームスはその3年後に亡くなった。

ふと気づくと本題から随分外れたが、要するに、大阪を「住みよい町」につくり替え、「元気度」と「文化度」を取り戻すためには何が必要かといえば、安藤の言葉を借りると（『朝日新聞』2007年6月2日付）、大阪は「八百八橋といわれるが、淀屋橋をはじめ大半は町人が造った（ように）、大阪の人々は公共心の伝統、いわばDNAはある」。問題はそれをいかに発掘し、「再生するか」であろう。これについて時空を超えた違いは承知のうえで、ふたたびボローニャに引き寄せていえば、現在の大阪に不可欠なものは、いわば相互信頼を基軸とした「エミリア精神」の形成であり、いいかえれば、それは神野直彦先生が主張される（『地域力の時代』三省堂）、「分かち合い」（omsorg）の精神にもとづく「共生する力」＝「地域力」の構築にほかならない、と私は考えている。

同時に、あらためて「地域」といわれ思い出すのが、宮本憲一先生の次の言葉である。「地域研究は旅である。現場にゆき、資料をあつめ、関係者とくに住民とはなしあってみて、はじめて理論をくみたてることができる」（『地域開発はこれでよいか』岩波書店）と説かれている。この言葉は、地域研究にたずさわるものにとっては、けだし名言であろう。かくいう私は、研究生活が（人生も？）そろそろ卒業の時期をむかえつつあるが、ひとまず旅だけは、「フーテンの寅」と同じように、体力が許すかぎり続けたいと思う今日この頃である。

(2016/11/10記)